

『落窪物語』小考

——その読者層をめぐる試論——

中山 マサエ

(一)

「物語は、住吉・宇津保の類」(『枕草子』・「物語は」の段)と記された『住吉物語』は、当時最もよく読まれた物語の一つであつたろう。世に大斎院と申し上げた村上天皇の第十皇女逸子内親王の斎院の「寝殿の丑寅の角の戸の間」には、「住吉の姫君の物語(絵二)描たる障子」が立てられてあつた(『今昔物語』巻十九、「村上天皇御子大斎院出家語第十七」・『古本説話集』)と伝えられるし、祭主輔親が、さる年の「冬、すみよしにはじめて」詣でた折、「女房などありて住吉のひめ君の事などいふ」のを聞いて、

たづねけむ昔のことのしらべとは吹く松風を聞きなされけ

る(『祭主輔親集』)

と詠じたことが、その家集に見える。

祭主輔親は大中能宣の子であるが、父の能宣にも、「すみよしのものがたりふにかきたるを、うたなきところくにあるべしとて、あ□(るとカ)ころのおほせごとにて」歌七首を詠んだことが、宮内庁書陵部蔵『異本能宣集』に見える。堀部正二氏は、この七首の歌と詞書とを詳細に検討され、(一)現存の『住吉物語』は、古本『住吉物語』の「筋を大体に於いて踏襲しているものと見て大過はない」。(二)「けれども、その細部に至ってはかなりの変化があつたろう」ことを論じられた上で、

(三)『無名草子』に、

『今とりかへばや』とて、いといたきもの今の世に出で来

たるやうに、『今隠篋』といふものを出だす人の侍れかし。
今の世には、見どころありてしいづる人もありなむかし。

とある言葉引用され、鎌倉時代には古物語の改作(変改)や
圧縮・翻案などがしきりに行われたと見られるから、現存の
『住吉物語』も亦その頃に部分的改作の手が加わつていよう。

現存本の巻末に見られる濃厚な勸善懲惡思想や、藤岡作太郎博
士によつていちちやく指摘された吉野時代以後の言葉遣いの存
することも、「改作当時の時代思潮を反映するものと見るべき
である」と結論された。

現存の『住吉物語』が鎌倉期以後の改作本であるかどうかは、
当面の問題とはかけ離れるから、しばらく論の外に置く。ただ、
堀部氏の指摘された異本『能宣集』の記事は、能宣の歿した正
暦二年以前に、既に『住吉物語』の異本が生れる機運に恵まれ
ていた——それ程広い読者層があつたことを物語つていて、わ
たくしには興味が深い。

更に、『源氏物語』・「篋」巻には、次の様な一節がある。

さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにやいつは
りにや、言ひ集めたる中にも、わが有様のやうなるはなか
りけりと見給ふ。住吉の姫君の、さしあたりけむ折は、さ
るものにて、今の世のおほえもなほ心ことなめるに、主計

頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思
し准へ給ふ。

玉鬘が住吉の姫君に同情するのは、その境遇があまりにも自
分に似ているからだ、作者は語る。——玉鬘は母夕顔に幼い
頃に死別してから後は乳母に養われて、筑紫で成長するが、住
吉の姫君も母宮の死後、乳母と乳母の娘侍従と淋しく暮してい
る。乙女となつた玉鬘は大夫監から追られて、恐怖のうちに船
路を京まで逃げ帰るが、住吉の姫君もむくつけき主計頭の毒手
をのがれる為に、ひそかに淀川を船で今は尼となつて住吉に住
んでいる故母宮の乳母の許にのがれて行く。初瀬の観音が運命
好転の機縁となるのも、両者に共通して見られる。とまれ、住
吉の姫君が玉鬘の造形の下敷きになっていることは、何人の眼
にも明らかであろう。

ここで注目されるのは、住吉の姫君に対する継母のあくどい
仕打ちが、玉鬘物語にはほとんど見られないことである。それ
は、光源氏に、

姫君の御前にて、この世馴れたる物語など、な読み聞かせ
給ひそ。みそか心つきたるもの女などは、をかしとには
あらねど、かかること世にはありけりと、見馴れ給はむぞ
ゆゆしきや(「篋」)

と語らせ、

継母の腹きたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしと思せば、いみじく遊りつつなむ、書き整へさせ、絵などにも書かせ給ひける。(一) (登)

と心配りをする光源氏の教育観が、そのまま紫式部の心の反映と見られるから、むしろ当然の処置であったと考えられ、換骨奪胎の妙を得た作者の技倆に感心させられもするのである。

(二)

この様に、『住吉物語』は広く読まれたと見られるのに対して、『落窪物語』にはその徴証に乏しい。僅かに、『枕草子』・「成信の中將は」の段に、

やむ事なき事、おもしろかるべき事、尊うめでたかるべき事も、雨だに降れば、いふかひなく、口惜しきに、何か、その濡れてかこら来らんがめでたからん。交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。よべをととひの夜もありしかばこそ、それをもをかしけれ。足洗ひたるぞにくき。きたなかりけん。風などの吹き荒々しき夜来たるは、たのもしくて、うれしうもありなん。(三) (巻本による)

とあるのが注目されるばかりである。文中に、「交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし」とあるのは、物語巻一で、少将道頼が落窪姫に向って、交野の少将と諱名された弁少将のことを、

かれはいとあやしき人の辭にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ、人の妻、帝の御女も持たるぞかし。さて身徒らに成りたるやうなるぞかし。

と言っているのを指すと見るべきことは、中村秋香の『落窪物語大成』以下諸註釈の説くところであるし、「足洗ひたるぞにくき。きたなかりけん」というのは、少将道頼が落窪姫と結婚して三日目の夜に、大雨の中を帯刀をつれて姫の許に通う道で、盗人と疑われて糞の上に坐り、姫の所に着いてから、帯刀の恋人阿漕の曹司で足を洗う条りと全く一致するから、『枕草子』にいう「落窪の少将」は、現存の物語の主人公と見て差支えなく、物語の筋も大筋で変わるところはなかつたものと見られる。

しかも、『風葉和歌集』に収める『落窪物語』の歌八首(物語巻三に見える大納言道頼の七十賀の屏風歌六首と、巻四に見える中宮と筑紫に下ることとなった志頼の四の君との贈答歌二首)が、そのまま現存本に見えること、現存本には異本とか別本とかいうべき写本が見当らないことを考え合せると、

『落窪物語』は『伊勢物語』や『源氏物語』の様に広く読まれず、従つて後の人の加筆などないままに伝わっているのではなからうか。後の人の手が加わつた場合には、構想上の矛盾や文章のたるみが見られるのが普通であるけれども、『落窪物語』には、巻四を除いてはそうした点が見られず、構想も緊密で首尾照応し、よくまとまっているからである。

巻四については、後人の追補とする筑土晴生氏説と、これに対する野口元大氏説とが対立している。確かに、巻四と巻一から巻三までの間には年立上の矛盾があるし、語法や文体の上でも異質なものがあるのは認められるところである。又巻四も巻末近くの辺りには、書き継がれたらしい痕跡がある。しかし全巻を後人の追補と見ることは、やはり無理で、数多い登場人物の後日談を読者にせがまれて書き継いだ様なことがあつたとしても、それは『源氏物語』などの書かれる以前のことであつたと考えたい。というのは、『源氏物語』に、『落窪物語』の影響と覺しい点が見られるからである。

かつて、長谷川福平氏は、『源氏物語』に於ける落窪物語の重なる影響」(『国学院雑誌』第七卷第六号)で、(一)紫上と落窪姫との境遇の類似、(二)車争いの事、(三)浮舟と落窪姫の苦難の類似の三点を指摘され、それを承けて藤岡作太郎博士が『国文学史

平安朝篇』で、

源氏が紫の上の継母に対する処置の苛酷にして、以て往日の恨を報ゆるは、左近少将が落窪の君の爲にその継母を遇するより出づ。源氏に王女御と髭黒の大将の北の方とが、その母の悪業の報いて、悲しきめにあひたるは、落窪の三の君、四の君の運命より得たるものなり。また浮舟の君の継父と落窪の君の継母と相似たるを思ふべく、乙女に、弘徽殿大后が、「命長くてかゝる世の末を見ることと、取り返さまほしう萬をおぼしむつがりける」は、落窪の継母が老後のくり言の趣あり。源氏の末摘花は、落窪の面白の駒を、男女とりかへて写せるもの如く、体細く、色白く、鼻の殊に目に立つより、いづれもその諱名を得たり。

と説かれ、更に、宮田和一郎氏が、箇条書きではあるが、

(一)惟成と惟光 (二)二条殿と二条院 (三)三条宮の造宮と

六条院 (四)面白の駒と末摘花 (五)典業助の腹痛と空院

の女房 (六)中納言の北方と弘徽殿女御 (七)左近少将の

報復と源氏

と数えあげられた様に、『源氏物語』には、『落窪物語』にヒントを得、換骨奪胎して創作したらしい箇所がいろいろとある。もちろん、継子の同情者が継母(父)に報復したり、継子が虐

待を少しも恨まず、却って孝養を尽されて年老いた継母(父)が反省し、さんげのくり言を述べたりするのは、継子いじめ物語のパターンであるし、車争いのことは、『宇津保物語』の「国譲」巻にも見え、賀茂祭には附きものであつたらうし、面白の駒の様な道化役は、上野宮・三春高基など、『宇津保物語』にも登場する。だから、これらのすべてが『落窪物語』の影響とは言えないが、『源氏』の王女御や鹿黒大符の元北方と『落窪』の三の君・四の君のたどった運命の類似や、浮舟の調度品を実の娘の結婚の調度品として取上げる(『落窪』では、継母が姫の屏風その他の調度品を取り上げたり、簞箱を自分の粗末なものと取りかえたりする)挿話などは、やや特異な話であるだけに、『落窪』から得たものと認めるべきであろう。紫式部も、『落窪物語』は読んでいたに違いないのである。

では、何故紫式部は『源氏物語』の中で、『落窪物語』の名なり、物語中の人物を登場させなかったのか。

一条朝を彩る中宮定子のサロンと上東門院彰子のサロンについて、三谷栄一氏は、『物語史の研究』で、

安和の変以来、藤原氏は一族一門の中において、兄弟叔姪、政権を争うて錦を削る分裂対立の状態に陥つた中略定子と彰子の間がうまく行く筈はない中略その人々に付き添う女

房達の交流などはどうも考えていられない

と説かれるが、わたくしは一步を進めて、ある種のライバル意識があつたのではないかと思う。それも、主として側近の女房達同志のライバル意識で、

清少納言こそ、したり顔にいみじうし侍りける人。さばかりさかしだち、真字書きちらして侍るほども、よく見れば、まだいとたへぬことおほかり。(『紫式部日記』)

という紫式部の清少納言評は、それをむき出しにしているものである。だから、中宮定子のサロンで『宇津保物語』の涼と仲忠との何れが勝っているかと羅氣になつて論じ合っているのを尻眼に見て式部は、「宇津保の藤原の君の女こそ、いとおもりにかはかかしき人にて、過ななめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しき所ななめるぞ、ひとやうなめる」(『螢』)と、女性が描けていない作品だとけなしているのである。『落窪物語』なども、清少納言などが面白がつて読んでいるのに対し、『葉の上に左近少将がうずくまる情景の何処が面白いのか』『少くとも、高貴な御方の前では読むべき物語ではない』と、退けたのではないか。光源氏が選り捨てた、「この世馴れたる物語」や「継母の腹きたなき昔物語」が多かつた様に、『落窪物語』も選り捨てられて、彰子サロンでは読まれな

かつたのではなからうか。

一条天皇以後、政權は道長一門の手に握られるが、文壇も亦この線に沿って推移する。かくて、『落窪物語』は僅かな説者に蔽おほられながら、辛うじて散佚を免れたと見るのは考え過ぎであらうか。

(三)

ここで、観点を變えて、『落窪物語』の背景となっているものについて、少しばかり考察を試みよう。

山岸徳平博士は、かつて物語の少将道頼の次男を祖父が長男を越えて溺愛した(巻四)とあるのが、藤原兼家が孫の道頼(山の井大納言)を溺愛した事実と酷似することを指摘されたが、塚原鉄雄氏はそれを受けて、兼家は孫の道頼(大千代君)を「いみじく思ひ聞えさせ給」うたが、父の道隆は妾腹の彼を、「よそ人の様に思し」、嫡妻に生れた「小千代君(伊周)」を、いかで疾くなしあげひとぞ思し」た。そこに、継子いじめめいた要素が見られる。兼家の歿後、二人は競争する形で昇進するが、それはあたかも物語で、「道頼と落窪の姫君との間に生れた兄弟の關係に全く符合している。」その他細かい類似点も合せ

て「指摘して置きたいのは、山の井大納言道頼は、作中の道頼とその子に投影せられているのではなからうか。」又、物語には、道頼の母の叔父の子に治部少輔即ち面白の駒と諱名された人物が登場するが、兼家の四郎道義は『尊卑文脈』に「日本第一色白也」と注せられ、「世のしれ者にて、交らひもせで止」んだと伝えられ、官も同じ治部少輔であった。更に、物語の道頼の乳母の子で阿漕と結婚し、その家司をつとめ、後に左少将になった惟成(これなり)は、花山院時代に活躍し、出家してからも『榮華物語』の筆者に好意ある眼で見られている惟成(これしげ)を想わせるものがあると説かれるのは注目に値する見解であらう。

これに對し、原國人氏は、物語巻三で六・七月の頃に御代替りのことが語られるが、『落窪物語』が成ったと思われる時代の前後では花山天皇から一条天皇の御代替りのみが、やはり六・七月(寛和二年)に行われていて符合する。又、物語の御代替りの記事は、法華八講の場面を分割する様に語られるが、寛和二年六月十八日から廿一日まで、右大將藤原濟時の願によって小白川に於て法華八講が営まれているのと奇しくも一致する。物語の作者は、『枕草子』にも見えて著名なこの法華八講のことを想起しながら、想を構えたのではないか。物語の主人

公一族の榮華と兼家一族の動きが重なることから推すと、作者は兼家に否定的な立場ではない。しかも、この物語に屢々賀茂祭のことが見えていることを重視すると、作者は賀茂齋院の周辺にあつたことも考えられる。当時の賀茂齋院は村上天皇の第十皇女で、世に大斎院と申しあげた選子内親王であることはいうまでもないが、母后安子は師輔の女、兼家とは兄弟の關係にある云々と説かれる。

以上の諸説は、『落窪物語』の成立年代を考える根拠として示されるものであるが、わたくしは、同時に読者の周辺にあつたことだとしても考えたい。

その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、
よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにも飽かず、
聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき
節々を心に籠め難くて、言ひ置きはじめたるなり。(『源

氏物語』・「笠」)

とは紫式部の言うところであるが、読者も亦「この世の外のことなら」ぬものとして、物語の世界を見たことであろう。そうした観点から、わたくしは、『落窪物語』は、やはり兼家・道隆と続く中関白家の人々の間で、まづ説まれたものと想像するのである。以上の諸先学の御指摘に加うべき私の根拠は多くは

ない。強いてあげると、上にも引く少将道頼が弁少将をそしめた言葉に「…人の妻、帝の御女も持たるぞかし」(巻一)とある。中村忠行先生は、内親王の臣下への降嫁は、承平年間、醍醐天皇の第四皇女勳子内親王が藤原師輔に降嫁したのを初例とすると指摘されているが、漸くその例が多く見られる様になつたのは、藤原兼家が村上天皇の皇女保子内親王を得た頃からではないであろうか。「帝の御女も持たるぞかし」という表現は、既にこれが普通の事になっていることを暗示し、兼家自身のことでもあつたのである。

それから今一つ。私の関心を呼ぶのは、物語の巻二に見える落窪姫の歌

へだてける人の心のみ熊野の浦のはまゆふいくへなるらむ
である。この歌が『拾遺抄』巻八・恋下に、「屏風にみくま野のかたをかける所に」と詞書し、初句を「さしなから」とする平兼盛の歌と同一のものであることは明らかである。宮田和一郎氏は、この歌をはじめ、『拾遺集』の歌を引歌とする例八例を指摘して、『落窪物語』の成立が『拾遺集』の成立以後にある一証とされたが、引歌によって物語の成立年代を決定することは極めて危険であるし、この場合は、中村忠行先生が『河海抄』の注を引いて、「昔物語には、屢々古歌を物語歌として、

『はじめてよみたる様に』用いる場合がある」と、『宇津保物語』・『源氏物語』や『河海抄』所引の『隠蓑』の例歌を挙げて反証されたことに従うべきであろう。

兼盛は、勅撰集やその家集によると、小野宮実頼その子実資・三条右大臣定方・大入道殿(藤原兼家)・九条右大臣師輔などの家に入入しているが、名所屏風歌を詠んでいるのは、『九条右大臣家の賀の屏風に』(小倉山)・「入道摂政の家の屏風に」(よしの山)と、『円融院御時御屏風歌』(住吉)・「安和元年大嘗会」の屏風歌(おもの、はま)・「天禄元年大嘗会」の屏風歌(いやたかの山)・「某年大嘗会歌」(せたのはし)以下十一首)などが知られる。実際はこれだけに限らなかつたであろうが、これらを参考にして考えると、右の兼盛の歌は師輔或いは兼家の家で催されたしかるべき賀の折の屏風か、大嘗会の折の風俗歌として書かれ、多くの女性の眼にも止つたものではないかと思う。中村先生は更に、

かく実在した調度品なり、累代の名物なりを、物語中に点出することは、決して珍らしいことではなかつた。『宇津保』には、「南風」(琴名)・「貞信公の石の帯」の名が見え、『源氏』には、「長恨歌の御絵」や「宇陀法師」(和琴名)が語られる。それは、予定された読者周辺の人物を物

語中に登場させ、その興味を繋ぎとめようとするのと同じく、当代一般に用いられたありふれた創作手法であり、伝奇的な物語から写実的な物語へと進む歩みの一つの姿であつた。

と論ぜられるのであるが、この物語のもつ庶民的な一面から考へて、大嘗会の歌であつたとは考え難く、兼家が道隆あたりのそれであつたと私は考えたのである。

註1 堀部正三氏 「新資料による住吉物語の一考察」(中古日本文学の研究)

註2 藤岡作太郎氏 「鎌倉室町時代文学史」

註3 筑土曙生氏 「落窪物語の成立過程」(東京女子大学「日本文学」第六号)・野口元大氏 「落窪物語論おぼえ書」(日文協編「日

本文学」昭和三四年四月号)

註4 宮田和一郎氏 「物語文学攷(平安時代)」三、落窪物語」

註5 山岸徳平氏 「書目解説・鎌倉時代」(岩波講座「日本文学」

註6 家原鉄雄氏 「落窪物語の人物とその成立」(国語国文「第十

九卷第十一号)

註7 原国入氏 「落窪物語」の成立について」(国学院雑誌「昭

和五十五年七月号)

註8 中村忠行先生 「帝の御女やは得たる『宇津保物語』の正領・

貴宮のモデル」(山辺道「第六号)

註9 中村忠行先生 『宇津保物語新攻』「物語歌の一面」(宇津保
物語研究会編)

〔附記〕本稿を執筆するに当って、中村忠行先生から、格別の御指導と助言を頂いたことを銘記し、御礼を申し上げますと共に、先生の長寿を祈念致します。